

会 議 録

会 議 名	第 2 回山陽小野田市 地域福祉計画・地域福祉活動計画策定委員会
開催日時	平成 2 8 年 1 1 月 2 8 日 (月) 1 8 時 3 0 分 ~ 2 0 時
開催場所	山陽小野田市役所 3 階 大会議室
出席者 (1 7 名)	宇部フロンティア大学人間社会学部 福祉心理学科長 工藤 隆治 出合地区社会福祉協議会 会長 佐井木 勝治 高泊地区社会福祉協議会 会長 磯部 吉秀 埴生地区社会福祉協議会 会長 五十嵐 章彦 小野田ボランティア連絡協議会 会長 和田 千鶴 山陽ボランティア連絡協議会 会長 水田 愛子 山陽小野田市民生児童委員協議会 副会長 山中 一豊 山陽小野田市民生児童委員協議会 監事 森川 繁夫 山陽小野田市自治会連合会 会長 岡本 志俊 山陽小野田市自治会連合会 副会長 千々松 正俊 山陽小野田市老人クラブ連合会 会長 平田 武 山陽小野田市福祉員の会連絡協議会 会長 篠原 明子 山陽小野田市母子寡婦福祉連合会 会長 森本 哲子 山陽小野田市子ども・子育て協議会 委員 加藤 善成 山陽小野田市障害者協議会 会長 宮川 力雄 山口県社会福祉協議会 主任主事 遠藤 真由美 公募委員 田中 絹枝
欠 席 者 (1 名)	公募委員 上野 正昭
事務担当課 及び職員	山陽小野田市健康福祉部長 河合 久雄 社会福祉課長 深井 篤 社会福祉課地域福祉係長 桑原 睦

	<p>地域福祉課地域福祉係主事 田邊 碧</p> <p>山陽小野田市社会福祉協議会事務局長 流田 幸彦</p> <p>地域福祉課長 沖野 浩</p> <p>地域福祉課主任主事 河崎 匠</p>
傍聴者	0人
会議次第	<p>1 事務局あいさつ</p> <p>2 委員長あいさつ</p> <p>3 議事</p> <p>(1) 「山陽小野田市の地域福祉について」委員による2分間スピーチ</p> <p>(2) 基本理念について</p> <p>4 その他</p>
会議結果	<p>○3について</p> <p>各委員が「山陽小野田市の地域福祉について」をテーマ2分程度でスピーチを行った。</p> <p>委員：私は現在、障がい者と関わる仕事をしているが、最近気にかかることは、過度なサポートによってその人たちの可能性を阻害しているのではないかということ。障がい者だけでなく、福祉が必要な人に対しどの程度、どのようにサポートしていけばいいのかが課題である。</p> <p>委員：辞書や地方自治法にあるように福祉の増進を図ってもらいたい。市民アンケートを精査して、活用をしてほしい。</p> <p>委員：私は施設で作業ボランティアとして活動しているが、年配のボランティアの人も皆いきいきとして輝いているが、高齢になって車も運転しなくなり、参加が難しくなっている。しかし、若い年齢層のボランティアはおらず、施設側も困っている。</p> <p>委員：高齢化社会を乗り切る覚悟を持たなければならな</p>

い。先日の市社会福祉大会での市長あいさつのなかで「市と市社協は車の両輪であり、力を合わせこれからの地域福祉に取り組んでいく」とあった。市と市社協はより一層連携を強めてほしい。また、地域住民からなる見守りは、行政に直結していないといけない。さらには、自治会等に入っておらず、地域住民と希薄な関係にある人たちにも見守りの必要はある。

委員：民生委員児童委員の信条に「地域社会の実情を把握することに努める」とあるが、あいさつ、声かけが一番重要であり、これが福祉のスタートである。

委員：民生委員児童委員は、地域福祉の最先端を担う役目ではないかと思っている。民生委員児童委員を長く続けていると地域のほかの活動に参加するようになるが、どの活動にしても地域が基本である。しかしながら、子供会、老人クラブ、女性会など地域で活動する人はどんどん減っている。地域の担い手が減っていることを危惧している。

委員：地域活動において、女性の高齢者の参加者は多いが、男性の高齢者は声をかけてお願いしても参加者は少ない。家族がいる人はさほど問題ではないが、一人暮らしの高齢の男性については非常に危機感を抱いている。だが、高齢者問題に対し、既存の計画もあるわけだから目新しいことをする必要はない。地域住民が地域福祉の重要性を理解し、推進していくのみである。

委員：福祉を広げていかなければならない。福祉に携わる人はみな同じ顔ぶればかりである。例えば老人クラブを挙げると、高齢者は増えているのに会員数は増えない。これは問題である。物事が浸透していくには時間がかかるが、一步一步進めていくことが大切だ。

委員：地域福祉といっても身近なところにある。体が不自由な人が近所にいて、自分の家の周りを掃除するときについでにしてあげるのも小さな福祉である。それが日常となっている人にとっては福祉と意識してやってはいないが、広がっていけば地域福祉につながる。自治会長のように地域福祉の関心の深い人たちが、関係機関と緊密な関係にあるように計画のなかで示してほしい。

委員：私は福祉員をしており、「いきいきサロン」を立ち上げた。参加者が減り、活動を縮小せざるを得なかったが、現在は百歳体操をしている。また、子どもと接する活動もしているが、そのなかで味噌汁を食べたことがない子どもがいることを知り、大変驚いた。子どもは地域の宝であり、地域が育てていこうということを耳にするが、そのとおりだ。

委員：最近高齢ドライバーによる事故が報道されているが、知人が「老眼で目がよく見えないけれど、運転している」と話していて、身近でもいつ高齢ドライバーによる事故が起こってもおかしくないと思った。もう一つ最近気になることは、親が子どもを子ども会に入会させないこと。子ども会だけでなく、私が所属する会も新規会員はほとんどいない。なぜ地域とのつながりが敬遠されるのか疑問だ。

委員：この委員会の委員構成をみると、子どもの分野に関して比率が少ない。第1回委員会のなかで「当たり前」のことが当たり前になれば良い社会になっていくと思う」との発言があったが、「当たり前」が通じにくくなった今、どうしたら皆が同じ方向を向いていけるのかを考えていく必要があり、それぞれの立場が少しずつ譲り合う寛容さが求められる。

委員：先ほどほかの委員からあったように、やっと市と社協が福祉の両輪となる時代が来たのかと思った。また、誰もが共に生きる社会をつくるために心のバリアフリーを目指すということをテーマに活動をしているが、福祉を分野別に扱うのではなく分野の垣根を越えたものにしていくことが大切なのではないか。

委員：昭和61年から県及び市の社協を中心として「福祉の輪づくり運動」を進め、現在、第5次福祉の輪づくり運動推進県域活動計画を策定し展開している。

委員：自治会で役員の担い手がおらず、負担が大きい。福祉活動は地域住民全体で取り組むべきだ。福祉は行政の役割が大きいですが、市役所で福祉を担当する職員はプロのアドバイザーであってほしい。

委員：計画を機能させていくためには、横のつながりが重要である。私が所属する地区社協ではさまざまな意見を聞くために、小規模の福祉懇談会を開催している。

「山陽小野田市に住んで良かった」と実感できる地域福祉を実現していきたい。

委員：かつて「向こう三軒両隣」と言っていたが、地域福祉の重要性が叫ばれる今こそ、昔ながらのコミュニケーションが大切なのではないかと思う。

委員長：地域福祉は住民同士のつながりを求めているが、実際はつながりがない。また、福祉は高齢者、障がい者、子ども等分野で分ける時代ではなく、包括的に考えていく時代になった。分野で区切るからこそ地域福祉という観点から広がらない。個々の分野をどう地域福祉に結びつけていくかがこの計画の焦点である。また、健康福祉部の既存の6つの計画はどのような成果があるのか。例えば、食育プランが策定された経緯はどのような

ものなのか。

健康増進課：国、県からの流れを受け策定した。地域の特性を生かした食育を推進する指針として策定した。

委員長：「食」は高齢者、障がい者、子ども等関係なくつながる分野なので、地域福祉を考える上で一つの取っかかりになるかもしれない。

ほかに委員から意見は。

委員：地域福祉の担い手不足のなか、どうやって若い世代に関心を向けてもらうかが課題だ。

委員長：今日は基本理念を作り上げるために委員の皆さんからスピーチをしていただいた。次回の委員会では、スピーチ、地域福祉計画市民アンケート、各課の個別計画を踏まえた基本理念の案を事務局から提示してもらい、それについて審議することとする。